



古井由吉論——その文学的展開と方法論的試行錯誤の記述

竹永, 知弘

(Degree)

博士 (文学)

(Date of Degree)

2023-09-25

(Date of Publication)

2026-09-25

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲第8702号

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100485886>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



論文内容の要旨

論文題目 (外国語の場合は、その和訳を併記すること。)

古井由吉論——その文学的展開と方法論的試行錯誤の記述

氏 名 : 竹永 知弘

神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程文化構造専攻

指導教員氏名	(主)	樋口大祐	教授
	(副)	梶尾文武	准教授
	(副)	宮下規久朗	教授

(注) 4, 000字程度(日本語による)。必ずページを付けること。

論文要旨

以下、本論文の議論の梗概である。

本論では、古井由吉の文学的営為および方法論的試行錯誤を四期に分けて論じる。具体的には、初期《1968～1970》、前期《1970～1980》、中期《1980～1989》、後期《1989～2020》の四期に分類する。

【第一部 初期《1968～1970》】は、古井が小説家となる以前、ドイツ文学研究者としてロベルト・ムージルやヘルマン・ブロッホ、ニーチェなどの翻訳を行ないながら、八編の短編を発表する一時期に当たる。【第一章】では、『円陣を組む女たち』（中央公論社、70・6）、『男たちの円居』（講談社、70・7）に収められたそれらの短編を取り上げる。文芸評論家の小田切秀雄がそれを取り上げ、古井は「内向の世代」と呼ばれた。ここではまず、その作品群の具体的読解を通じて、作家が実作のレベルでいかに「内向」を実践したのか、その内実を確かめる。とりわけ重視するのは、古井が度々作中に書き込む「停止」という行為である。その上で相対する哲学から書かれた江藤淳『作家は行動する』（講談社、59・7）を補助線としながら、「内向」の思想で貫かれた作家の出発期を記述するとともに、戦後文学史への再定位を行なっていく。

【第二部・前期《1970～1980》】は、古井が専業作家となり、一定のストーリー性を有する作品を多く発表していた一時期を指す。【第二章】では、「杳子」（『文藝』70・8）、古井によるロベルト・ムージル「静かなヴェロニカの誘惑」「愛の完成」の翻訳（『世界文学全集』筑摩書房、68・10）を論じる。本章では、作家の代表作とされることが多い本作における、ムージル翻訳から受けた多大な影響を分析する。そして、古井の作家的シグニチャーとされる「病い」の主題を筆頭にして、作中人物の造形や人物位置、ストーリー的な展開などの一致を認めていく。先行するテキストを翻訳し、自身のテキストを生成するこの作家の常套的手法の原初のかたちを本作とムージル邦訳の関係性から剔出を試みる。

【第三章】では、『水』（河出書房新社、73・4）を取り上げる。本作が発表された一九七〇年代前後は「長編小説の時代」（篠田一士）と呼ばれた時代だった。本章では、七〇年代に作家が発表した作品群の整理を試みながら、この時期に作家が書いた短編連作集『水』を議論の俎上に載せ、そうした時代に逆行して「短編」に文学的可能性を見出す古井が、その際に採用した方法論の戯画化として本作を読み解いてゆく。さらに本作において、自身の「生活」における文学性の不在の打開策として、作家は『今昔物語集』を筆頭とする既存のテキストを翻案するという方法論を発明する。結論部では、後藤明生の発言を補助線としながら、彼らが継続的に発表した「短編連作」を「構造主義」時代の文学に位置づけながら、作家の今後の文学的営為の方向性を決定づける「連作」という方法論が有する可能性について論じる。【第四章】では、『聖』（新潮社、76・5）を論じる。作中に見えるサエモンヒジリという民俗学的な意匠から、作家の「物語への接近」として位置付けられることが多い作品である。しかし他方で、

佐々木中が「物語批判」性に着目した読解を提示するなど、作品は二方向の評価に引き裂かれている。本章ではこの分岐に着目する。後年、古井は本作を振り返り、現代の物語が「レフレクションとシムボル」による間接性を排しきれず、「物語への試み」というディレクタンティズムに解消されるものでしかあり得ないという困難を吐露した。だが、この物語の失敗という行為の瞬間においてこそ、物語に批評的な可能性を有していると考えられる。それは蓮實重彦を中心に展開された「言説」による物語批判をパフォーマティブな次元において乗り越えるものである。本章では、作品の「物語への接近」／「物語への批判」の両側面をストーリーに沿って確認し、『聖』という作品の到達点を再定義する。

【第五章】では、『栖』（平凡社、79・11）、『親』（平凡社、80・12）を論じる。前作「聖」の続編であり、いわゆる「三部作」をなす本作において、前作の作中人物・岩崎と佐枝は東京で新たに共同生活を開始しようとしている。そこで問題になるのが、「東京」という舞台の描かれ方である。古井由吉という作家にとり、重要なトポスのひとつである東京という場が、いかに書かれたかを確認した上で、古井が繰り返し発言している、『栖』『親』で「フィクションということに行き詰まった」という発言の実際を、作品と照らし合わせながら確認していく。

【第三部・中期《1980～1989》】は作家の方法論的実験がひとつの成果に結実する時期と言える。結果的に本論文中では充分に取り扱えなかったが、その方法論の延長線上で書かれた『仮往生伝試文』（河出書房新社、89・9）に至るまでの時期を中期と捉える。【第六章】では、『山躁賦』（集英社、82・4）を論じる。『栖』『親』において「フィクションということに行き詰まった」と語っていた作家だが、『山躁賦』で、いわゆるフィクションを捨てて書いてみたら「……」筆が生き生きした記憶があるんです。その『山躁賦』のときの軽快な味が忘れられない」と好意的に語る。その背景にあるのが、本作以降、古井が自らの作家的原点に立ち返り探究を開始する、ムージル由来の「エッセイズム」という手法である。本章では作家のその方法論的な転換点を記述するとともに、そこ起きている話者から著者へ、というテキスト生成のあり方の変化を論じ、これ以降、古井が自身の名刺がわりにしていく「エッセイズム」という方法論の実情を分析する。

【第四部・後期《1989～2020》】は、古井自身を限りなく思わせる「私」が、老いや災害、かつての自身の記憶などをめぐる思弁を展開する、連作群を多く発表した一時期に当たる。【第七章】では、『神秘の人びと』（岩波書店、96・6）を取り上げる。マルティン・ブーバーの編著『神秘体験告白集』（1909）に収録された修道士や修道女、信者らによる神秘体験の告白を拾い読み、翻訳する行為から成立する本作を具体的に論じることで、この時期に顕著な作家の「神秘主義」への接近の背景を顕在化する。無論、同時代的には、オウム真理教による一連の事件に象徴される、九〇年代の宗教言説への興隆に対応している。だが作家の経歴を鑑みるとき、むしろ明らかになるのは、ロベルト・ムージルからの持続的な影

響であり、同時に〈初期〉からの一貫性であるだろう。ゆえに本章では、神秘主義者の言説を辿りながら、作家の原点たるムージルを経由して、作家の「体験」と「告白」をめぐる持続的な関心を明らかにする。

さらに本論には【補論】として、黒井千次、既刊同人誌『文体』に関する論考を計三編収めている。古井由吉論としての可読性を優先して、本論文末尾に三編を付録的に収録するという掲載順も考えたものの、それら論文が有する、本論文全体というより、各期の古井の文学的営為に対する裏打ちとしての側面を重く取り、各期の末尾を収録位置に決定した。【補論1】では、古井同様「内向の世代」に数えられる黒井千次を取り上げる。その「内向の世代」なる呼称は、「自我と個人的な状況」に自閉した「脱イデオロギーの内向的な文学世代」という批判に由来する。だが一方で、黒井を作家として育て上げたのは、共産党系団体の新日本文学会の機関誌『新日本文学』であった。労働者・農民の民主主義を標榜する同誌に、黒井は多数の小説や評論を発表、シンポジウム等にも参加している。従来の研究・批評の領域では、初期黒井がこうした政治的空間を作家的な母胎とした点が閑却されている。よって本稿では、黒井が「内向の世代」以前に『新日本文学』で掲載した小説を、各時期の黒井の言説を参照しながら読解する。その上で作品群を〈疎外論的系譜〉／〈存在論的系譜〉という総計的な性質に分類し、作家史的な見取り図を提示する。その上で「内向の世代」に再接続することで、黒井の一連の足跡を歴史化する。

【補論2】では、一九七七年に後藤明生、坂上弘、高井有一、そして古井由吉が創刊した季刊同人誌『文体』を取り上げる。その創刊・終刊の経緯や、寄稿者・企画の情報の整理を通じて書誌の整備を行ないつつ、同誌が果たした、彼らを「近代文学」（文学史）に接続する触手としての役割を記述する。【補論3】でもまた同誌を取り上げる。その上で前章よりはいつそう射程を広く取り、「内向の世代」が一九七〇年代後半に「文体」を誌名に冠して雑誌を刊行する意味を考える。『文体』同人らは折に触れ、従来の「文は人なり」という言い方に代表される、文体を属人的なものと捉える文体観に違和感を表明していた。よって本章では、『文体』誌上に掲載された文体論を読み込むことにより、文体を「身体」の比喻で語る旧来の文体観から、任意に選択可能な「衣装」のモチーフで文体を捉え直す試みを素描するとともに、作家たちの八〇年代に向けてのスプリングボードとしての『文体』の意義を確認する。

論文審査の結果の要旨

氏 名	竹永 知弘
論 文 題 目	古井由吉論——その文学的展開と方法論的試行錯誤の記述
要 旨	
本論文は、現代日本を代表する小説家・古井由吉の作品群を考察対象とするモノグラフである。古井における独特にして複雑な小説技術の形成過程を検証しつつ、初期から後期までの創作の展開を俯瞰的に把握し、この作家の全体像に迫る。古井作品の通時的検証を通して、現代日本文学史に新たなパースペクティブを付与することが本論文の眼目である。全体の概要を示す「はじめに」および「おわりに」を除き、本論7章、補論3章の計10章から構成される本論の概要は、以下のとおりである。 第Ⅰ部「初期《1968～1970》」は、古井が小説家となる以前、ドイツ文学研究者としてロベルト・ムージル等の翻訳を行ないながら短篇を制作した時期に注目する。第1章は、「内向の世代」という名称の呼び水となった『円陣を組む女たち』『男たちの円居』所収作を取りあげて論じている。ここでは、江藤淳『作家は行動する』を対照項としつつ、作中に反復される「停止」という契機に着目し、その状態が古井における小説散文の内的リアリティと結びつくことが論証される。複数の作品にまたがって考察が進むため、議論が拡散してゆくきらいがあるが、筆者の議論は、「内向」という概念を、イデオロギー的な黒倒としてこれが発せられた当初の文脈から引きはがし、小説の方法として再考しようとする意志に貫かれている。 続く補論1は、同じく「内向の世代」の作家のひとりである黒井千次の初期の動向を考察する。旧左翼文学の拠点である『新日本文学』から出発した経緯に着目し、初期作品を「疎外論的系譜」「存在論的系譜」の二系列に分類しつつ再評価している。こうした作業を通して、筆者は「内向の世代」を非政治的な文学者たちの集合体と捉える見地を実証的に斥けている。 第Ⅱ部「前期《1970～1980》」は、芥川賞受賞作「杳子」を経て、連作『水』および三部作『聖』『栖』『親』を論ずる、本論文の中核部である。第1章では「杳子」について、古井自身によるムージル「静かなヴェロニカの誘惑」「愛の完成」の翻訳との比較対照が試みられている。この作家におけるテキストの生成において、先行するテキストの翻訳が枢要な方法となっていることを明らかにすることが、筆者のここでの狙いである。 第3章では、短篇連作『水』を論じ、作家の駆使する翻案という方法を『今昔物語集』等の参照先を明らかにしながら考察する。あわせて「鏡」の主題と「私」の複数化という方法が、1970年代的な「構造主義」時代の文学に位置づけられ得ると主張する。興味深いアイデアではあるが、発話の中心を欠いたまま聴き語りが何重にも接続するような複雑性・媒介性・関係性を特質とするこの作品系のナラティブへの切り込みについては、物足りなさが残る。叙述の形式に関するより具体的な分析が、今後の課題となるところであろう。 第4章では、『聖』が考察対象となる。作中には「サエモンヒジリ」という民俗学的意匠の導入を可能ならしめるような「物語への接近」が見られる一方で、近い時期に蓮實重彦を中心に展開された「物語への批判」に通底する要素が散見される。そのことを指摘したうえで、本作に露呈する「物語の失敗」こそが、物語批判をパフォーマンス的な次元において乗り越えるような可能性を担保すると論ずる。いささかアクロバティックな論理展開ではあるが、筆者の議論は堅調なストーリー分析とモチーフ考証に立脚しており、概ね首肯しうる。	
主査記載 氏名 (自署) 樋口 大祐	

第5章は『聖』に続く二篇『栖』と『親』を論ずる。ここで筆者は作品の舞台である「東京」という新開地の描かれ方に注目し、古井の随筆『東京物語考』を参照しつつ、徳田秋声や正宗白鳥ら自然主義文学との関係や、昭和40年代の中頃が作品の舞台とされることの意味、「つまらない小説」を書くことについての自己言及等々を話題にしている。だが、作者自身の「つまらない」という自己評価の意味を対象化し、両作品を通して問い直すには至っていない。両作品の解釈に照らして、本章に提供された「退屈」という論点を小説の方法論あるいは文体の問題として再定位することが今後の課題となろう。

続く補論2および補論3では、『栖』や『親』の連載媒体となった雑誌『文体』の解題・総目次が配され、およびこの雑誌に集合した作家たちの問題意識に関する考察が行われる。とくに、本誌に展開された文体論が「文は人なり」というクリシェを否定し、80年代文学を用意したことを、作家たちの言説に即して可視化している。目次を含めて、他の研究者にも利用価値のあるレファレンスツールたりえていてと評価できよう。補論3章を通して、本論文は古井由吉の個人研究であることにとどまらず、より広く「内向の世代」と呼ばれる一群の作家を視野に収めることができた。これによって本研究の記述は、現代日本文学史の本格的な記述のための助走たりえていると言える。

第Ⅲ部「中期《1980～1989》」は、フィクションに行き詰ったのちの古井が、ミュージルへと再び回帰し、「エッセイズム」という手法を打ち出した時期であることを明らかにしている。第6章は「山驛賦」を論ずる。そこでは語り手を虚構として設定するという構えが放棄され、書き手としての古井の存在が前景化している。このように指摘する筆者は、テキストを構成する「接続」という機能に注目を促す。今後の課題として、ここで言う「接続」の実態を作品に即して明らかにする作業が待たれる。

第Ⅳ部「後期《1989～2020》」は、エッセイズムが円熟期を迎えたころの古井作品を組上に載せる。第7章では『神秘のふびと』が論じられる。本作は、マルティン・ブーバーの著書に収められた諸々の神秘体験を拾い読み、翻訳する行為から成立しているが、著者は、90年代前半の新霊性文化との関わり合いを視野に入れながら、本作にミュージルからの持続的な影響を見て取っている。いまだ考証の余地を多く残すが、もはや小説なのかどうかも定かでないこの作品を視野に収めることによって、本論文は小説家古井由吉の「現代作家」たる所以を明らかにしえていると評価できよう。

本論文は、古井由吉の小説作品を対象に、1960年代末から到来した近代的フィクションの機能不全状況を、幅広い文献踏査に立脚しつつ記述している。作品分析とあわせて、古井をめぐる言説を累集しそれらを検証する論考は、現代文学史の優れた記述たりえている。古井由吉研究としてののみならず、現代文学研究として深い意義を持つ貴重な成果である。

上記のような評価に鑑み、本審査委員会は、論文提出者・竹永知弘氏が、博士（文学）の学位授与にたる資格を有するものと判断した。

審査委員

区 分	職 名	氏 名 (自 署)	区 分	職 名	氏 名 (自 署)
主 査	教授	樋口 大祐	副 査	講師	有澤 知世
副 査	教授	宮下 規久朗	副 査	准教授 (東京大学)	倉敷 茂
副 査	准教授	梶尾 文武			